

事休す、楠瀬工場は閉じて仕舞った。

この時、自分は頗る剛情であった。それは以前に、英国ゴム雑誌にて、再生ゴムは技術上、配合剤として絶対必要であり、値のいかに係らず、生ゴムの四割までは、使用されるとの記事を見ていたので、今後は、自分だけで単独事業を統行することと、尼崎市の神崎駅前、友屋ゴム製造所なる小工場を建設して、再生ゴムを統行製造し、昭和七年から十三年五月まで及んだ。

このとき、たまたま東洋紡績株式会社は、かねてより自動車タイヤ、コードのメーカーであり、一方名古屋にトヨタ自動車株式会社が出現したので、トヨタの自動車用タイヤを名古屋にて製造せんとすの計画を立て、東洋紡と名古屋の代表的実業家が手を握った。ところがこのころ、漸く東亜の空は戦雲濃くなつて来たため、政府は資本の新投入を認めず、工場新設は不可能となつたので、ここで新設を断念し、既設工場の買収合併の方針をとつた。しかし、東洋紡績では、ゴム工場経営の経験なく、適当なる担任者を有しなかつたから、はじめに試験的に小工場を買収することとし、その白羽の矢は、自分の経営せる友屋ゴム製造

所に当り、又、自分もゴム経験者として入社し、同社のゴム事業建設拡大に参加することとなつた。

東洋紡は第一着手に友屋ゴム製造所を資本金拾万円の内外再生ゴム株式会社を改組し、社長に名古屋商工会議所会頭神野金之助氏、専務に東紡調査課長鷲甚之助氏、自分は取締役支配人として席末に列した。以後、既設会社を買収合併し、資本金八百万円の東洋ゴム化工株式会社となり、又合成ゴム製造の目的にて分身会社東洋合成化工株式会社を設立した。なお本来の目的である自動車タイヤ製造の促進拡大のため、神戸市のダンロップ極東ゴム株式会社の買収を交渉したが、陸軍は東紡の買収より

わが心の自叙伝 (二)

金子 武蔵

この家の選定に母の意向がどれだけ盛られていたかは、今となってはたしかめようもないが、しかし結果的には母の趣味にピッタリ合つたものであつたことは事実である。母はのちにせん女と号するホトトギス派の俳人となり、「夏草」という句集を上梓したがそこには大正五年の新年のものとして雑煮すや 朝潮ゆるく 浜によす

という句がある。大正五年といえば、すでに一谷山荘に移つてたときであるが、この句には、二の谷時代の回想が織りまぜられていと見てもよからうと思ふ。明らかにあとから増築せられたのは台所の西側にある八畳ばかりの子供部屋とオモヤの北側の廊下から西に通じている十畳ばかりの洋風の応接間であつた。兄はやが

りも協力を希望し、東紡にてダンロップ株式の五分の一を保有し、役員を派遣することとなつた。これは東洋ゴム発足後八年目のことであつた。ダンロップ合併中止を機会として社長以下役員更替し、後任社長に富久力松氏就任、社名を東洋ゴム工業株式会社と改称、数次の増資により資本金五拾五億円となり、一応、ダイヤ・メーカー四社のうちに加わることが出来た。さて、話題は今一度再生ゴムのことに転じたい。大正六年、脇の浜の東レザ敏馬分工にて、始動した再生ゴムの作業は、鳴尾の楠瀬工場、尼崎の友屋ゴム製造所、東洋ゴムの川西再生ゴム工場、昭和十八年再生ゴム月産九十二噸と

引つがれて、作業を継続し、経営者は三軒四軒したがバトンをつぎ、過去五拾年、連続成長して来たのである。東洋ゴムが今日本邦二、三位のゴム会社として進出したのは、全く東洋紡の組織力、企業精神によるものであるが、しかし其間に鈴木商店伝統の「ねばり」が合流したことも否めない。追つて、自分は東洋ゴム引退後同社が創立の中国精粉工業株式会社社長に就任、ついで昭和二十四年十二月、新法人として再出発の伊藤忠商事株式会社に入社、従来の繊維部に対して新発足の物資部の顧問となり、在職九年、六十八才にて退社。現在は新見化学工業株式会社の会長の職に在り、かぞへ年七十六才となつた。さいわい健康を感謝している。

いと答えた由である。また二町ばかりの暗キヨをローンクをたよりに学友と通り抜けたのも一再ではない。始末の悪いゴンタだつたのである。

生まれて間もない子グマが贈られたことがあつたが、さびしい谷間の家の頑童は友を得たかのように狂喜した。時は梅雨のころであつて、父の故郷高知からはイチゴのようなヤマモモが届いていたが、ジヤンのスキをうかがつてこれを子グマに与えた。好物とばかり鉢にむしゃぶりつく子グマの喜びは同時に頑童の喜びであつた。しかし頑童の友たつことは災難でもある。家から西北二、三十間のところにかんりの池がつくられて来たが、子グマはこの池に投げ込まれた。しかし頑童の予想を裏切つて子グマは彼よりもたくみに泳ぎ、何回となく池を回つてあ

くになると、わざと木のそばを通つて振り落そうとする。(ただし乗り手のいかによつて手加減をするものは馬に限つたことではなく、会社にも官庁にも学校にもい(る)そのため生傷がたえることがない。

家から海岸に向つて四、五十間の距離は、ゆるやかなが傾斜をなしていたので、工事の資材を運ぶためにトロッコが設けられていたが、ゴンタがこれを見がすはずがない。最初は近距離運転にとどめていたが、距離はしだいに長くなり、ついにトロッコは暴走して二、三十間下のできたての大きな門を大破してしまつた。

気がつく例の植込みに面した部屋に寝ており、そばには白衣の女性がいる。一時気を失ひ、療病院から看護婦さんがはせつけていたのであろう。

たかも水泳を楽しんでいるかのようである。これを見て頑童は手をあげ歓声を発して狂喜したのである。またこの子グマに犬の首輪をつけ、鎖でひいて海岸につれ出して水泳や魚釣りの伴をさせた。まったく人騒がせな話である。

学者とか思想家とかの伝記を読むむと、幼いときに父とか祖父の書だなから、あるいは倉から書物を取り出して、まだ読めないままに異常な興味をそそられたというよ

うなことがよくしるされてる。しかし私の家は少し立身した番頭さんの家柄にすぎぬから、そういう機会はな。子供部屋で読本をよんだとか習字をしたとかいう記

見ながら死んだのちはどうなるか

と、いつまでも、物思いに沈んでいたことをおぼえている。吹く風の、いずこより来り、いずこに去るやが、さだめがたいと同じように、我のいずこより来た、いずこに去るやは、答えがたない問題であるが、いまでも、それが哲学の基本的問題にほかならないと考へている。暖炉を前にした物思ひは、頑童がやがて灰色の人生を、いやがうえにも灰色に描く憂愁(キルコゲール)のとりことなり、また日暮れて羽ばたくミネルバのふくろう(ヘーゲル)に心を寄せはじめる前兆であらう。暴走して門を大破したトロッコは、二の谷川を埋め立てるためのものでなかつた。当時、二の谷川はすでに暗きよのうちに消え去つていたのである。このトロッコは家の西側から北側を回り、ガケの中腹にあつた例の「二階」の左手にある高さ四十間ばかりの坂に設けられたレールをクロクロで引き上げられて盛んに資材を運搬していた。このレールの左手につづらおりの坂があつたが、これをのぼりつめると、そこは二の谷と一の谷との間にある別の谷間の始まりのところであつた。この谷は深さ三、四十間のもので、底には泉がわき、よくキジが水を飲みにきて

は薪など貯蔵する物置きがあった。猿小屋の右手の坂をのぼるとあずまの左手に出ることが出来たが、そこには南北に三間、東西に三、四十間ばかりの整備された土地があり、埋め立てられた土地と同じ目的に使用されていた。上段にも同じような土地があったが、ここは果樹園で、主としてモモが栽培されていた。屋敷は果樹園までで、その上には南北に二つの外人屋敷があった。

池のある芝生の東南から五、六段の石段をのぼると、東西にも南北にも三十間ばかりのやはり掘りくずしによって得られた土地があったが、ここにも芝生が植えられた。少年時代に野球に興じたなつかしい場所である。この芝生の東南は一の谷山荘につづいていたが、東に進むと倉があり、その東にはもう成人したあのクマの転居先がありその南には猿小屋、さらに門番の家があった。

あまり上等ではない門をはいると、右手にはブドウだ、左手にはかなり立派な植え込みがあり、とりわけ春の日のサクラの花と秋の夜のモクセイのかおりとはみことであった。家はもと外人の避暑宿でもあったと思われるもので、二階建てではあるが、造作はまっ

たくお粗末というほかないものであった。

一階の東側に六畳と八畳、西側に六畳の部屋があった。中央は板の間で外人の住んでいたところの姿をとどめていた。東北のすすみは電話室であったが、その下にはセラールがあつて外人はここにジャガイモやタマネギを貯蔵していたのである。板の間の南側は温室で、ランを主とする鉢植えの花が咲き乱れて、なんとなくエキゾチックな感じのするのは、いかにも外人の住居らしかった。板の間の北側にはバスがあつたが文字通り洋風のもので、したがってポイラーで湯をわかすようになっていた。このポイラーの東側にあるきざしをのぼると、左手はキッチン、右手はのちに建て増された和風の食堂であった。

二階には、東側に六畳と四畳半西側に八畳と十畳の部屋があつたが、下の温室にあたる場所はガラスばりの明るい応接室であつた。しかしオモヤの西北には建て増した二階建てがつづいており、その上には十畳ばかりと四畳半ばかりの洋間、下には三畳と六畳との部屋があつた。

温室のすぐ南にある、白い花を咲かせ、むせるような香をただよ

わせるバラのたなをくぐって、右には初夏に大輪の真白くかおり高き花をいたたく泰山木がある、そしてさらに東西に桜の若木——移転後間もなく母のサトより贈られたもの——が立ち並ぶぎざしをくだると外人が丹精をこめて作った芝生があつた。もとはローン・テニスにも興じていたのである。芝生の西北には趣のあるあずまやがあつたが、あたりの茂みからは埋め立て地の石がきをかいまみることができた。この芝生からまたぎざしをくぐると、その花壇には外人好みの強烈な色彩の花が咲いた。

温室から西に行くと、外人の作った趣のある池、噴水、植え込みがあつたが、植え込みの終わるあたりのガケの下は埋め立てによって得られた土地であつた。またオモヤのすぐ西側にはゴムの木が亭々として高くそびえて清爽の感を与え、野球場のすぐ南——池のすぐ北にはフジだながあつて、夏には憩いのすず風を与えてくれた。

二階の西側の二間は父母の居室であつたが、父は起きている間のほとんどを、昼は明るく、晴れた日には対岸の紀州の家まで見える南向きの応接間で過ごし、ただ酷暑の候だけは、鉄拐の峰からすず

風の吹いてくる西北の洋間にいるのをよそに、いたずらに頭童を欣喜雀躍せしめつつ、たちまちに二の谷の山谷を、ついで一の谷の山谷を一変してしまつた。ために谷神、山神の怒りを買つたともいえるであろう。しかし造成された土地には今日多くの人々が住んでおられる。

父の設備結果においては多くの方々に住地を与えたことになつてゐる。樂しかりし少年の日にかえるべくもない私にとっては、ただこのことのみが慰めである。両親の家に生まれて生涯そこにとどまるとか、それと同じ村や町に終身「一家」をもつてゐるとかいふ場合のみ、心のふるさとというものもありうる。けだし内も外と相即するからである。しかるに現代人の特徴は故郷喪失（ハイマートロージツヒカイト）にあるといわれるが、私の両親は生活の本拠を移すこと六回、私に至つては一家をかまえてから九回の多きに及び、しかもその間に一家離合の時期さえ含まれてゐる。まことに故郷喪失の典型のようなものであつて、心のふるさとなどありようはずはない。

しかしこの私にもふるさとに準ずるものがないわけではない。そ

しい日本趣味の母がまゆをひそめるのをよそに、いたずらに頭童を欣喜雀躍せしめつつ、たちまちに二の谷の山谷を、ついで一の谷の山谷を一変してしまつた。ために谷神、山神の怒りを買つたともいえるであろう。しかし造成された土地には今日多くの人々が住んでおられる。

父の設備結果においては多くの方々に住地を与えたことになつてゐる。樂しかりし少年の日にかえるべくもない私にとっては、ただこのことのみが慰めである。両親の家に生まれて生涯そこにとどまるとか、それと同じ村や町に終身「一家」をもつてゐるとかいふ場合のみ、心のふるさとというものもありうる。けだし内も外と相即するからである。しかるに現代人の特徴は故郷喪失（ハイマートロージツヒカイト）にあるといわれるが、私の両親は生活の本拠を移すこと六回、私に至つては一家をかまえてから九回の多きに及び、しかもその間に一家離合の時期さえ含まれてゐる。まことに故郷喪失の典型のようなものであつて、心のふるさとなどありようはずはない。

しかしこの私にもふるさとに準ずるものがないわけではない。そ

れはしいていへば須磨であり、とくに一の谷山荘である。たしかに私が常時この家に住んだのは、大正二年の秋ごろから、大正六年の三月末までというごく短期間であつて、その後は高知市の小学と中学とに在学し、ついで京都の第三高等学校に、また東大文学部に学んだ。しかし昭和三年に東大を卒業するまで休暇には必ず一の谷山荘に帰省したし、ことに三高時代は土曜の夕刻に帰宅して日曜の夜ないし朝に京都に立つのをつねとじていた。だから九才から二十四才までの約十五年近くの間、この家は私にとっては生活の本拠であつたのである。

ここに移り住んでからも、私は二の谷時代と同じくひどいゴタであつた。当時ようやく用い始められたアルミの弁当箱をもたされて通学したが、これには一尺ばかりヒモがついていた。帰途にはそのヒモでむやみに振り回して、木や石にぶつけるので、弁当箱は一週間の終わりに必ずデコボコになつて役に立たなくなつてしまつた。こうも物を大切にしないようでは行く末が案ぜられると母がマユをひそめたが、その後の運命は母の心配したとおりであつた。

生まれて間もないワニの子が父

に贈られたので、一階南側の温室で水ソウに入れて飼うことになつた。珍しくてたまらず、竹でつづいてはいるうちに、つい勢がこうしてワニから血が吹き出た。あとでこわごわいくとワニは死んでい

こういうことは当然わが身に返ってくる。空気銃を買ってもらつて、うれしくてたまらず、むやみにスズメやヒワやヒヨを追ひ回した。しかし、あるときタマをこめておいたことを忘れて、銃口を手のひらに当てながら、ステッキのようにして一の谷をくぐっているうちに、銃は暴発して手のひらから血が吹き出た。大騒ぎとなつて神戸の医者に連れて行かれたが、大あばれにあげられるので医者はいかにカプトをぬぎ切開した箇所を再び縫い合わせてしまつた。タマはいまでも右の人さし指と中指とがわかるあたりの肉のうちにとどまつてゐる。医者に連れて行つてくれたのは、お人よしのジヤンである。この人は父が高知でデッチ奉公していた友人か同僚であつたらしく、父に対してはかくべつ忠実であり、私に対しても特別の愛情をもつていたが、あるとき

毒づくので、単純なジヤンは本

気になつておこつた。すると危険を察知した頭童はたちまちマシラのごとくかたわらの松の木に登つて、いっそうひどい雑言をはい

こうとしたので、頭童はそれがとどかぬ頂にまで登つた。やがて樹上からは一条の水がくぐつて、いつもの確にジヤンのハゲ頭に命中した。あわてふためいて顔を洗

しかし、この頭童の内面には憂

母のタミはなかなかガン健な人で、九十才を過ぎるまで働きつづけたが、目だけはひどく悪く、父の弟の楠馬さんも同様であつた。対象のしかたは多少異なつていて

父は連日連夜の激闘に耐えて、

母のタミはなかなかガン健な人

る。しかし狂はまた狂狗でもあつて、並みはずれた大志をいだき、

第二の原因は家庭のふんいきであつたと思う。私の家は少し立身

しかし父は自分が正規の教育を

ことならざるをえなかった私は、いっしか人文主義的教養に心を寄せるようになる。

最初に私の心をとらえたのは、イギリスの作家ギッシングの Private Papers of Henry Percraft という作品であった。

一の谷山荘は、もと外人が住んでいたため、なんとなくエキゾチックなおの漂っていたことが、そのひとつの原因であろう。ギッシングのこの作品は、五十才すぎ

て意外な財産がころげこんだライクロフトという架空の人物が、それまでのロンドンのスラム街における文筆生活をやめて、温暖の氣候にめぐまれ風光明媚な西南イン

グランドの川に面した、また海からもあまり遠くない閑静な町に自分の趣味にあった家を借り、忠実な老女をハウスキーパーとして花

鳥風月の日々を楽しみつつ、四季おりおりのことに触れてこしかたをエッセイ風に回顧する一種の自叙伝(同時にギッシングの)であるが、まだ十分には読めないままに、この作品がいたく私の心をと

らえたのである。しかし、これには一の谷山荘のエキゾチックなおのが影響していたのであろう。ただ私の場合には、思想や文化にあこがれをいだ

くといっても、ヨーロッパのものであった。私が高等学校に在学していたころ、果樹園の北側には

シュトレローというドイツ人が住んでいた。今回、調査してもらうと、同氏はキールにあるクルツ

プ系の「ゲルマニア造船」の部長であったが、日本海軍の艦政本部が潜航艇をつくる技術のレベルアップのため招聘して、川崎造船所に勤務させていた人である。

氏の来日期間は、大正九年から十四年の由であるから、ちょうど私の中学上級時代から高等時代にあたるわけである。

当時シュトレロー氏は四十才であり、夫人は三十才すぎであったであろう。夫の方は技師らしく実直で温厚な人柄であったが、決してガン健ではなくしばしばゼン

息になやんでいた。これに対して夫人の方は、顔立ちはなかなか美人ではあるが「細腰楚々」とはおよそ縁遠く、タケはほぼ夫に近く

まわりははるかに夫をしのぎ、なかなか無邪気で活発なるドイツ女性であった。夫妻には、十才ばかりの女兒と五才ばかりの男児と

があり、姉はオルトルード、弟はヒーワツツといったが、外人のつねとして多くアマさんまかせであ

ったため、姉の方はオツァン、弟の方はポイさんで通っていた。いたずらざかりの二人はよくか

き根をくぐって私の屋敷に侵入してきた。先方の屋敷が家屋のある段と芝生のある段だけであったの

に、私の方ははるかに広く、畑もあり、池もあり、温室もあり、それにクマもサルもいて、少年少女

がウサをばらすにはこと欠かなかったからである。これら二人にさらに東隣の稲垣さんの屋敷の一角

をかりていたオランダ人の六才ばかりの男児ピッチェ君も加わり、芝生で球投げをしたり、はては相撲をとったりして、なかなかぎや

やかであった。こんなわけでシュトレロー家の子供たちとは特別に親しくな

った。幹事 十河一正氏ご入院 京都大会以来、過労気味のところ、この度貧血症状がかさみ、岡

山医大附属病院へ入院されました。十河氏の病院宛先きは左記の通りです。岡山市 岡山大学医学部附属病院 平木内科 六百四号室

この間久し振りで春雷を聞いた。春雷は雷の生ぶ声であるが、倭宗

達画くところ風神雷神の図は背に太鼓を負い、手には撥を持って叩いているこの趣向が名作とされて

いる。立春後初の雷、蛩の頃よく鳴るので虫出しの雷とも歳時記

には記せられているが、余り続けでは鳴らず一二つで止むのがその特徴のようである。これを合図

に出ようと将に待ち構えている虫蛇等がしびれを切らすことである

う。聞くところ雷と云えば、ドンナウエッターと云う独乙語がある

そうである。雷日和の意味でまあーとかあきれたとかおやおやとか云う間投詞の役目をする。近頃

の物価上昇に主婦達から出る吃驚り言葉も所謂ドンナウエッター……たつみ誌も発刊以来、春雷の轟

昭和41年1月24日(月) 東京辰巳会新年会 ◎当日出席者(順不同)

- 住田正一、甲斐喜八郎、安藤珍成、二階堂行徳、菊地輝男、石田俊一、北村徳太郎、楠本直美、池田五六、北西以佐久、小島 実、川添英治、谷金 治郎、後藤圭介、田子富彦、佐々木義彦、齊藤庸吉、高橋剛男、島野能武男、酒井 温、富樫英介、遠山市郎兵衛、堤達一、芝喜代三、鈴木 丸衛、瀬戸口又、中山 憲、内藤 好治、西川政一、長東 昭、広野 敬吾、益子史朗、山成卓爾、松村義三郎、宗 真正、山下元徳、吉田秀太郎、三浦 淑、幸松文太、藤芳 新吉、六岡周三、本重 志原 淳一郎、山田甚蔵

たつみ 第五号 昭和41年7月1日発行

編集人 柳 田 義一 発行人 辰巳会本部 神戸市生田区京町72 大陽鋳工株式会社内 電話 3281 分室 2254 印刷所 岡部証券株式会社

私の「心のふるさと」

高石 淳

去る五月十日辰巳会の全国大会を京都嵯峨の天竜寺で催され、出席者も東京から九州迄全国から参集されたので二百名に及び会長並に各幹事

の挨拶、「嵐」の著者城山三郎氏の お話等あり誠に盛会であった。昼食は本堂で天竜寺独特の凝った精進料理で珍しかった。万事幹事の行届いた配慮で心豊かな会であった。

私もこれに出席してお陰で私の「心のふるさと」である竜安寺へ暫く振でお詣りすることが出来て心からうれしかった。昼食後本堂裏の縁に腰を下して久方振りに有名な庭園を心ゆくまで眺め入った。この庭園は天竜寺の開祖夢窓国師の築造になるもので禅園としては代表的なものだそうで現在国宝になって居る。新緑の嵐山を背景とし、幽邃な曹源池を眺めて居るといっか俗界を離れ禅境に在る様な気持になる。

そして静かに眺めて居ると昔日の懐しい思出が次々に浮んで来る。それは昭和二十五年の頃私が日本油脂の大阪支店長当時黒部社長のお伴をして関管長をお訪ねしたのが最初であるが、元来この天竜寺は嵐山等附近の風景環境がよく且つ所謂嵯

峨野の名所遺跡が多いので行人の心を引くところである。それで私もこれを機会に屢々訪れる様になり、そして関管長の人格、慈濟隱心田老師(現在は高岡市国泰寺管長)の情熱に引かれ次第に足しげくなり心の指導を受ける様になった。特に禅堂の修業を受けた訳ではなかったが、対談のうちに自ら教えられるところがあり、酒中にまた金言あり、或は揮毫を願ひ、漢詩の手ほどき等随分お

厄介になった。或は仕事の上で又は日常の事などで疑問あれば直ちに訪れて教を乞ひ心の支えとした。従って一時は随分天竜寺通いをしたものである。私としては心の指導所として忘れ得ぬところである。揮毫は軸に額に色紙に沢山頂いて居るが最も記念として居るものは「たつみ」第三号に掲載した「水之徳」である。これは関管長に特にお願いしたもので私の座右の銘として永く自室に掲げてある。其後私が門本電機商事株式会社(日立製作所の特約店)の社長をして居った時、社員の指導精神として関管長に、書いて貰いたいことを毎日の朝礼に社員と共に合唱した記念のものである。其外仏画では管長に達磨像を、心田老師には観音像を書いて貰ってある。殊に観音像は

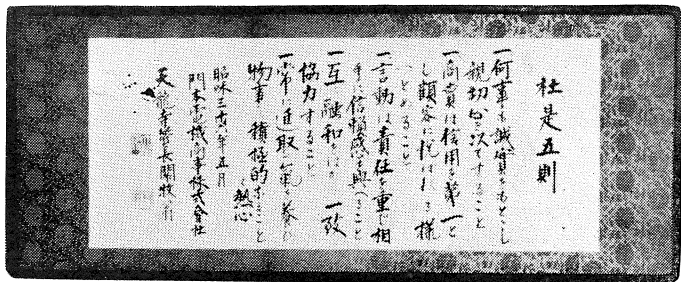
心田老師の力作のもので黒布に金泥で書かれてあり、像の各線は観音經を極細字で綴り連ねたもので誠に美しく貴いものである。いづれも家宝として大切に保蔵してある。

当日管長を訪ねたが生憎長野地方に旅行中とのことで拝顔出来なかったが慈濟院を尋ねたら偶然にも心田老師が居られたので久し振りに懐しい童顔を拝することが出来てうれしかった。観音のお引合せであろう、思出を新にした。

午後は観光バスで新しく出来た西山ドライブウェイを観光することにになり西山連山の稜線を心地よくドライブした。出発の途中釈迦堂の前を過ぎ、かつて嵯峨の祭に来て釈迦堂の松明の物すごかったことなどを思出して懐しかった。今度の天竜寺での辰巳会には思出深い大会となった。(五月二十日記す)

辰巳会嵯峨に遊ぶ(所感の愚作)

嵐山花散新緑鮮
辰巳会天竜本山
嵯峨風色西山景
一日清遊尽其觀



天竜寺管長関牧翁の筆になる社是五則